

児童における関係性攻撃の認識についての研究

(中間報告)

筑波大学大学院人間総合科学研究科 関 口 雄 一

Children's knowledge of relational aggression

Graduate School of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba SEKIGUCHI, Yuichi

要 約

本研究では、児童が実際に抱えている関係性攻撃についての認識、関係性攻撃観の内容を実態調査から明らかにすることを目的とし、小学5、6年生児童208名に対して文章完成法による質問紙調査を実施した。その結果、得られた記述は先行研究から想定した「規範」、「効力感」、「結果予期」、「特徴についての知識」の大カテゴリにほぼ含まれ、関係性攻撃観の内容を網羅的に把握できたと考えられた。また、各カテゴリに記述された回答数から、多くの児童は関係性攻撃について否定的な認識を持っていることが明らかになった。さらに一定数の児童が、関係性攻撃を身近な問題として捉えていたり、正当化するような攻撃観を持っていることも明らかになった。

【キー・ワード】 関係性攻撃, 児童, 社会的情報処理

Abstract

The purpose of the present study was to reveal content of the knowledge that children are actually having about relational aggression from the investigation of actual conditions. The participants (208 fifth- and sixth-grade children) completed a questionnaire that included the sentence completion test. The results showed that sentences that most of participants had described were classified into the four large categories that had been hypothesized from the previous studies. The four large categories that described relational aggression were “Norm”, and “Self-efficacy”, “Outcome expectations”, “Knowledge of the feature”. These categories were thought to be able to cover all content concerning the knowledge of relational aggression in the children. Moreover, the number of answers described in each category revealed that a lot of children had negative recognition about relational aggression. Additionally, some children considered relational aggression as a familiar problem and others had the knowledge that justifies relational aggression.

【Key words】 Relational aggression, Children, Social information processing

問題と目的

近年、学校での暴力やいじめは、子ども達に関わる重大な問題のひとつであり、児童の攻撃性研究の重要性が指摘されている。その攻撃性研究では、いじめ問題に関連する攻撃行動として、関係性攻撃 (relational aggression) への注目が高まっている。関係性攻撃とは、「意図的な操作や仲間関係にダメージを与えることによって、他者を傷つける行動」と定義された攻撃行動である (Crick & Grotpeter, 1995)。具体的には、無視や仲間外れ、噂を流すといった、いじめに特徴的な形態をとる攻撃行動を指す。この関係性攻撃は、加害・被害の立場に関わらず、心理・社会的不適応と関連することが示されており (Crick, Ostrov, & Werner, 2006; 岡安・高山, 2000)、子ども達の心身の健康に関わる重要な課題である。そこで、本研究はいじめの報告件数が急増する時期である小学校高学年の児童を対象に、関係性攻撃を問題として取り上げる。

関係性攻撃の生起について、有力な知見を提供しているのが、Crick & Dodge (1994) の社会的情報処理 (SIP) モデルである。この理論では、社会的行動の表出は、各自のデータベースとなる潜在的知識構造 (latent mental structures) を利用しながら、手がかりの符号化と解釈、目標の明確化、反応の検索、反応決定、実行の 6 つのオンラインの情報処理を通して行われると想定している。そして、各情報処理でエラーや歪みが存在すると、有能な社会的行動の表出に失敗すると考えられている。実際、関係性攻撃を多く行う児童は、架空の関係性挑発の社会的文脈において、符号化と解釈にて相手の行動を敵意的に認知することが示されている (Crick, 1995)。しかし、過去の関係性攻撃研究では、SIP のオンライン処理のみに重点を置き、データベースとなる潜在的知識構造との関連についてはあまり検討がなされてこなかった (Werner & Nixon, 2005)。そこで、本研究では、潜在的知識構造と関係性攻撃の関連について検討する。SIP モデルにおける潜在的知識構造とは、過去の経験に基づいて形成される記憶の貯蔵で、獲得されたルールや社会的知識からなるといわれている (Crick & Dodge, 1994)。つまり、本研究での潜在的知識構造とは、過去の関係性攻撃に関わる様々な経験を通して獲得する関係性攻撃についての認識と捉える事ができる。そこでまずは、関係性攻撃についての認識の内容を明らかにすることを目的とする。

攻撃行動についての認識を扱った先行研究では、規範的意識と自己効力感を中心にしてきたので、その 2 側面が基本となる内容と考えられる (Davis-Kean, Huesmann, Jager, Collins, Bates, & Lansford, 2008; Huesmann & Guerra, 1997)。また、別の先行研究の指摘より、一般に関係性攻撃は有効な問題解決方略だという結果予期も含まれることが想定される (Cillessen & Mayeux, 2007)。さらに、先行研究の対象が主に身体的攻撃であったことから、関係性攻撃に特徴的な性質についても考慮に入れる必要があると考えられる。例えば、関係性攻撃は身体的攻撃に比べて、その被害が不可視という特徴がある (Bauman & Del Rio, 2006)。こうした関係性攻撃に特徴的な性質についての認識が、独自の要素として含まれる可能性が考えられるのである。よって、関係性攻撃についての認識は、「規範」、「効力感」、「結果予期」、「特徴についての知識」から構成されると考えることとする。そして、本研究では関係性攻撃についての認識を「関係性攻撃観」と呼ぶこととし、その定義を、「関

係性攻撃に対する個人の規範、効力感、結果予期および関係性攻撃の特徴に関する知識」とする。

以上の議論を踏まえ、本稿では、児童の関係性攻撃観の内容を明らかにすることを目的とする。

方 法

調査対象者と調査時期 千葉県に住む小学 5, 6 年生児童 208 名 (5 年生男子 53 名, 5 年生女子 52 名, 6 年生男子 52 名, 6 年生女子 49 名, 6 年生性別不明 2 名) であった。調査方法は質問紙調査であり, 調査時期は 2010 年 7 月から 2010 年 9 月であった。

調査内容と手続き 質問紙では, 関係性攻撃において代表的な 3 つの攻撃形態である無視, 仲間外れ, 悪い噂話を流すという行為を「意地悪な行為」とまとめて表現することで関係性攻撃を教示した。そして, その「意地悪な行為」の経験 (加害・被害・目撃など第三者的な立場) の有無を尋ねた。最後に, 文章完成法による質問項目を設けた。そこでは, 「あなたは, これらの意地悪な行為についてのどんなイメージを持っていますか」と教示し, 回答欄の文頭にある「無視は」, 「仲間外れは」, 「悪い噂話を流すのは」という 3 種類の記述 (Ex. 「無視は _____」) に文章を続けるように回答を求めた。得られた項目は, 心理学専攻の大学院生 4 名が KJ 法を実施して分類した。

結果と考察

児童 207 名の回答から, 1,114 件の項目が得られた。そのうち関係性攻撃について, 加害や被害, 目撃など何らかの立場での経験があると回答した 177 名の記述, 941 件を主な分類対象とした。なお, 関係性攻撃経験群と未経験群では, 回答したカテゴリ数の平均に差はみられなかった ($t(205)=.33$, $p<.74$)。

分類の結果, 18 種類のカテゴリが得られた (表 1)。その中の 14 種類のカテゴリは事前に仮定した大カテゴリである「規範」, 「効力感」, 「結果予期」, 「特徴についての知識」に含まれ, 大カテゴリ「その他」に残りの 4 種類が含まれる結果になった。具体的には, 大カテゴリ「規範」には, 「無視はひどい」「仲間外れは悪いこと」「悪い噂話を流すのは, 相手が嫌いな人なら仕方がない」など行為の良し悪しを評価する個人の規範の記述が分類された。大カテゴリ「効力感」には, 「無視はかんたんにできる」などの関係性攻撃の遂行に対する自信を示す記述が分類された。また, 大カテゴリ「結果予期」には, 「無視すれば, 相手を思い通りにできると思う」「仲間外れは自分に返ってくると思う」など, 関係性攻撃の遂行の結果, 一般的に生じると予想される事態を示す記述が分類された。そして大カテゴリ「特徴についての知識」には, 「無視は相手を傷つける」, 「仲間外れはよくあること」, 「悪い噂話を流すことはバレない」など関係性攻撃の性質を示す記述が分類された。なお, 大カテゴリ「その他」に分類された「具体的な行動記述」は, 無視, 仲間外れ, 悪い噂話を流すという 3 種類の行動それぞれの辞書的な内容を示した記述であり, 関係性攻撃というまとまった攻撃形態についての認識という点から外れていると考えられたので, 今後の検討から除外した。同様に「性差別」「分類不能」の記述も検討から除外した。最終的に, 大カテゴリ「その他」からは「対処」のみを含め, 以上の

15 カテゴリをもって、関係性攻撃観に含まれる概念が包括的に抑えられたと考えられた。

各カテゴリに記述された回答数を検討すると、「有害性」や「否定」など児童の関係性攻撃観の中心は、関係性攻撃に対して否定的な認識である可能性が考えられた。次いで、「頻度」や「自己効力感」、「正当化」の記述が多いことから、児童達にとって関係性攻撃が身近で、対応の難しい微妙な問題であるという認識を持っている可能性も考えられた。

表1 児童の関係性攻撃観の記述分類結果

カテゴリ		度数	割合(%)	記述例
A 規範	A1 否定	184	19.55%	無視はよくないと思う
	A2 正当化	58	6.16%	どうでもいいとされている人だったら、仲間外れもしかたないと思う
	A3 肯定	15	1.59%	悪い噂話を流すことは、おもしろいと思う
	A4 遂行者否定	19	2.02%	無視はしている方が悪いと思う
B 効力感	B1 自己効力感	65	6.91%	仲間外れはかんたんにできると思う
C 結果予期	C1 肯定的結果予期	39	4.14%	悪い噂話を流すことは、相手をすごくこらしめることができると思う
	C2 事態悪化	15	1.59%	悪い噂話はどんどん広がっていってしまうと思う
	C3 自分の気分悪化	22	2.34%	仲間外れは、したらきつと後悔すると思う
	C4 否定的結果予期	24	2.55%	悪い噂話を流すと、自分にかえってくると思う
D て特 の徹 知に 識つ い	D1 有害性	309	32.84%	無視は相手をきずつけると思う
	D2 頻度	73	7.76%	仲間外れはよくあることだと思う
	D3 秘匿可能性	6	0.64%	無視しても、ごまかせると思う
	D4 普及	8	0.85%	悪い噂話を流すことは、誰だって1回はしていると思う
	D5 集団	12	1.28%	仲間外れはグループですることだと思う
E そ の 他	E1 対処	3	0.32%	仲間外れされたら、他の子と仲良くなればいい
	E2 具体的な行動記述	76	8.08%	無視は相手の話をきかないことだと思う
	E3 性差別	5	0.53%	悪い噂話を流すことは、女子がよくすることだと思う
	E4 分類不能	8	0.85%	噂を流すのは、いい噂なら別にいいと思う
合計		941	100.00%	

今後の研究

今回の研究によって、児童が実際に抱いている関係性攻撃観の内容が包括的に捉えられたと考えられた。今後は、本研究の結果から児童の関係性攻撃観を測定可能な尺度を作成し、その信頼性・妥当性を検討することが求められる。また、関係性攻撃観と実際の攻撃行動の関連における予測的妥当性の検討や、関係性攻撃の遂行に影響を与えられと考えられる友人関係の特徴との関連を検討していく予定である。

引用文献

- Bauman, S., & Del Rio, A. (2006). Preservice teachers' responses to bullying scenarios: Comparing physical, verbal, and relational bullying. *Journal of Educational Psychology*, **98**, 219-231.

- Cillessen, A. H. N., & Mayeux, L. (2007). Variations in the association between aggression and social status: Theoretical and empirical perspectives. In Hawley, P. H., Little, T. D., & Rodkin, P. C. (Ed.), *Aggression and adaptation: the bright side to bad behavior*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Inc., pp. 135-156.
- Crick, N. R. (1995). Relational aggression: The role of intent attributions, feelings of distress, and provocation type. *Developmental and Psychopathology*, **7**, 313-322.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1994). A review and reformulation of social information processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, **115**, 74-101.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995). Relational aggression, gender, and social psychological adjustment. *Child Development*, **66**, 710-722.
- Crick, N. R., Ostrov, J. M., & Werner, N. E. (2006). A longitudinal study of relational aggression, and children's social-psychological adjustment. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **34**, 131-142.
- Davis-Kean, P. E., Huesmann, L. R., Jager, J., Collins, W. A., Bates, J. E., & Lansford, J. E. (2008). Changes in the relation of self-efficacy beliefs and behaviors across development. *Child Development*, **79**, 1257-1269.
- Huesmann, L. R., & Guerra, N. G. (1997). Children's normative beliefs about aggression and aggressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 408-419.
- 岡安孝弘・高山巖 (2000). 中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス. *教育心理学研究*, **48**, 410-421.
- Werner, N. E., & Nixon, C. L. (2005). Normative beliefs and relational aggression : An investigation of the cognitive bases of adolescent aggressive behavior. *Journal of Youth and Adolescent*, **34**, 229-243.

